

祝 建築学科35周年

- 東京理科大学工学部建築学科創設35周年を振り返る -

昭和37年神楽坂の地に建築学科が開設されて以来、今年で35年を迎えました。高度成長期の中で産声を上げ、各時代の様相に呼応しつつまた一方で、着実に伝統と呼べる実績を培ってきた理科大建築学科の卒業生の方々に、紙面上で大学生活を一気に振り返って頂く企画です。

社会では当たり前前の縦の繋がりが希薄な学生生活を、時代や職種を超えて共通の空間に押し込めてみることに意味を見出すことも無駄ではないかもしれません。昔日を懐かしむだけでなく、理科大の移り変わりやこれからの展望などが垣間見える会報同窓会となることを期待しています。

「時の流れは斯くも速いものか？」

澤田 日出海(部1期)
竹中工務店 広島支店

「おきな庵」でかつうどん(かつどんではない...念のため)「キッチンクマ」でカレーライスを食い、佳作座で三本立てを観て日が暮れた。浜田教授の講義の声が、おやじの子守歌のように外堀の柳の小枝を震わせた季節の風と共に右の耳から左の耳へ抜けて行った。そんな時、教室が大きく揺れて目が覚めた。新潟地震だった。けだるく怠惰だったあの青春の日々がもう30余年も前の事だったとは...。あの時の付けがまわり、ゼネコンサバイバルゲームの中で今は居眠りの暇もない。

「新たな分野への挑戦を期する」

鈴木 啓一(部2期)
東電設計 建築本部建築管理部

理科大に入学した昭和38年当時の建築界は、東京オリンピック、大阪万国博覧会の開催を数年後に控え、また、高度経済成長の波に乗り、ここ数年前のバブル期

と比較をしても遜色の無い程華々しい時期であった。私自身の建築学科専攻動機は、この華々しさに憧れを抱いたものであったと思う。

卒業後は、国内外の火力発電所、原子力発電所を主体とした、比較的地味な構造設計と、残念ながら、学生時代の希望とは、多少違う道を歩んできている。

卒業後30年を機に、学生時代の希望に近い仕事にもチャレンジしたい念を抱いている昨今である。

「曳家考」

福田 誠一(部3期)
福田誠一設計事務所

この不況時、県道拡巾計画により自邸の建設という仕事に、ありつくことが出来ました。

というのもその県道をはさんで向い合うように、親の家と自宅が建っていて、いずれも昭和初期の二階建の瓦葺きの建築なのです。

町並が新しく変化していくのとは対照的に、古い家を残すことをまず第一と考え、そこで登場するのが、曳

家工事です。親の敷地に古い家二棟とその隣りに新築棟が道に平行に並ぶ案となりました。親の家、新築棟と工事も進み、今年5月27日未明、一時間半をかけて、自宅が巾員9メートルの県道に敷かれたレールの上を、静々と横断したのです。さらに数日かけて、180度回転し、所定の位置に無事たどり着くことができました。

「今、ベトナムに思う事」

中村 貞夫(部4期)
大林組東京本社 海外建築部

私は現在、海外建築部に在籍し東南アジアを担当している。特にベトナムに拘って5年になるが、ドイモイ政策の下で近代化を進めている、その進歩の早さに驚いている。

大豪邸、近代ビル群の隣りのスラム街、舗道の屋上で食事をし、事務所ではコンピューターを使い、CADを使って設計を行う等々。富と貧、新と旧、とが渾然一体となって近代化を進めている現実を我々日本人の目で見た時、ベトナム人の新しい技術への好奇心と同時にバイタリティーを強く感じている。

私はこの国の建設分野の発展に微力ながら参画する一方で、この国が今後どの様に発展して行くのか興味を持って見て行きたいと思っている。

「しばらくは改修の仕事に全力」

千葉 寿彦(部5期)
千葉構造設計コンサルタント

構造事務所を開業して20年近くたちましたが、どうかこうにかやっております。得意冷然(こちらには縁が少ない)失意泰然の気持ちのつもりでおるのですが?...

神戸の地震の後、公共建物の耐震診断の仕事がでてきて、時勢から設計の仕事は少なくなっているし、設計に比べて手離れが良いものだから、ついつい設計が疎遠になって、設計が懐かしくもなっております。考えてみれば、今まで新しい建物を造りすぎて、地面にはバンバン杭を打ち込み、解体するコンクリートの塊の産業廃棄物、地球に優しくないのかと、しばらく改修の時期でも良いのかと思ったりしています。

「グルメの記憶」

宇根元 健一(部6期)
大成プレハブ設計部

昭和46年卒浜田研の同期生は5人、小人数でアットホームな研究室だった。助手や院生の方々と連立って、よく神楽坂下のそばや「翁」に行った。たまたま浜田先生が加わると2階の座敷でスキーマの講義まで始まってしまう。翁にはカツソバというユニークなそばがあった。そばの上にカツが1枚のっけていて衣にダシがよくしみ込んでいるボリューム満点のメニューだ。卒業後、他のそばやでは見かけない結構めずらしい一品だと思う。又、卒論が一段落した後、浜田先生に連れられて築地のすし屋「江戸銀」で打ち上げをやった記憶がある。

先生のおかげで当時の学生としてはちょっぴりグルメ気分も味わえたのである。その浜田研を卒業して26年たつ。今、材料・防災とはまるっきり縁遠い集合住宅の設計に携わっています。

「学生時代を振り返る」

長谷部 廣行(部7期)
西松建設 技術研究所

私は昭和43年入学の第7期生ですが、当時は学生運動が最も激しい頃で、お堀の向こう側ではしょっちゅう機動隊が突入しているのが見られましたし、また私が2年生の時には隣の市ヶ谷の自衛隊で三島由紀夫が割腹自殺を遂げるなど、色々なことの多かった時代でした。4年生では今は亡き浜田先生の研究室に入り、東京都の防災避難計画を作成したのを思い出しますが、先生はかなりの食い道楽な方でして、一度は神楽坂の奥まった所にあった料亭に研究室の学生全員を連れていって下さったのを覚えています。当時はよく食べ、よく飲み、よく遊びましたが、現在の神楽坂を訪ねましても昔の面影が薄れてしまい、ちょっと寂しく思われる今日この頃です。

「入居者の交流生むマンション手がける」

麻生 誉(部11期)
積水ハウス 東京特建

学生時代はバイトと麻雀に明け暮れ、試験はカンニング。こんな生活を続けていた割には建築基準法と同期ということもあって、会社の中では「法の番人」と呼ばれ営業マンからは恐れられています。いま一生懸命やっているのはハートフル・ハウスという賃貸マンション。共用部分に食堂や託児所、銭湯のような大浴場があり、入居者どうしが仲良くなれる仕掛けのあるマンションです。ぜひ一度見に来てください。忙しい時でも昔の仲間とはよく会って情報交換をしています。理科大のボケグループと言えは有名だったんですよ。私の大事な宝物です。

「意匠設計という天職に満足感」

稲川 清士(部12期)
大高建築設計事務所

本校を卒業して早20年、年齢的にも不惑を越え、我が道を迷わず歩んでいる。と言いたいところだが、葛藤の日々はこの先20年も続いて行くことだろう。思えば、そもそも大学で建築学科を受験したのも声高に人に語れるような志しがあったわけでもない。学生時代も設計実習以外には好きといえる授業もなく、進級や卒業の及第点を辛うじてとれたのは、優秀な友人のおかげに他ならない。そんな延長から意匠設計の道を選んで今日に至っているが、今ではこの道で良かったんだと思っている。近年の業界の不況には少なからぬダメージを受けているが、何よりも自分の好きな事をしているという幸せは掛け替えのないものだと感じる。まだまだ負けずに頑張ります。

「構造事務所のネットワーク築く」

鈴木 裕 (部13期)

TAC建築設計事務所

先日、平野研究室同窓会には、74人ものご参加を頂き、盛況のうち閉会を迎え、先生をはじめ、参加者皆様の御協力を頂き、幹事の一人として、紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。

息子の誕生を機に、15年前に事務所を開設、現在は、古巣(理大)の近くで構造設計を生業としています。

阪神大震災以降、新技術が相次いで開発、発表され、高度の耐震性能を持つ建物も設計されています。ところが、バブル崩壊後も、市中に盛んに建設されている建物のなかには、構造計画を全く無視した、安直な意匠設計のまま構造へ持ち込まれるケースも希に見受けられます。対する構造は四苦八苦して辻褄合わせ。これでは、間仕切屋さん、計算屋さんの世界であり、プロの建築家、エンジニアの仕事とは言えず、後味の悪い思いだけが残ります。設計業界も、細分化(専門化)していく現在、お互いのプロとしての分野を尊重し、大切にできるシステムの構築をしておかないと、大手に淘汰されてしまう事でしょう。

ちなみに、私達の構造事務所は、大プロジェクトに対しては、構造事務所同士でネットワークを組んで(組まれて)対応する準備は、できています。

98年、自分自身の反省を含め、マンネリ打破、更に一層の探求に努める事が、目標です。

「同期会への参加を呼びかけ」

高杉 政宏(部14期)

TOS計画工房

卒業以来、約18年経ちましたが理科大の同期の仲間では「例の会」という会合があり、ここ数年参加しています。だいたい、10~15人位集まります。卒業後、建築関係が主ではありますが、設計・設備・現場・研究所・役所等いろいろな分野に進んでいますので、会に出かけていくと自分の知らない諸々の話が聞けるので楽しみにしています。同期の方で連絡を貰えれば、「例の会」のことをお知らせ致します。

私自身はどうしているかといえば、卒業後、約4年間の建設会社設計部を経て独立し、現在に至っていますがこの不況のなかで、なんとか事務所活動をおこなっています。また、(財)東京都建築士事務所協会にも出ていますが、何も分からないうちに独立した為、他の事務所の事情や建築設計界の事等の生の声を聞くことができて勉強になっています。

「学生時代の思い出 e t c」

青山 成夫(部15期)

大成建設 横浜支店

飯田橋のキャンパスとはとても思えない学び舎を離れて、早17年。今回、思わぬ事で、学生時代の思い出等を書くように依頼を受け、どんな事を書こうか思案したのですが、思い出すのは、クラブ活動のことと、構造1

がなかなか合格しなかったことです。(今でも年に一度は、不合格になった事を夢にみず。寝汗をかきます。)

話題をかえて、この度建築学科創設35年を迎えるに当たり、建築業界が大きくなうねりの中に飲み込まれ、今後大変な時代が来る事を踏まえ、建築学科が無くならないよう建築学の最先端を歩んでいって欲しいと思う今日このごろです。

「理科大時代の教育は実務に直結」

黒岩 哲彦(部16期)

黒岩哲彦都市建築設計室

私達の学科は、学ぶべき要素を提供してくれていたのだと、スタッフがいれかわるたびに痛感いたします。

「3つの彫刻のための空間」といったテーマが示すアートからの導入。作用因子、制御因子等が示す、生産及びシステムの視点。実地に則した構造計算や木構造のディティールの学習。熱力学を用いた実際の室内外の環境の数値化。それらに加えて、哲学や論理学、トポロジーや形態学、建築の歴史等。ひとつひとつが、今日の仕事に役立っていることに気づくゆえに、ああ、あの時、もっとはげんでいればよかったと思うのです。

「20年来の教師陣になつかしさとしお」

若林 弘之(部17期)

スペース

昭和57年に卒業した私は、10数年、図面かきや監理をしていましたが、ある日、人事部にとばされました。そして去年、当社に私以来2人目の理科大生の応募がありました。履歴書に「倉淵研」とあるのを見て、うれしくなった私は(ちなみに私は前身の久我研です)集団面接だというのに思わず質問してしまいました。「田中さん元気?」答えは当然「元気です!」

入社後の彼女(32期・鈴木敦子さん)と学校の話をしましたら、20年変わらない共通の先生が大勢いらっしゃるのにびっくりしました。すごいですね。理科大建築学科は不滅です。

「社寺から近代建築まで幅広く」

山本 裕之(部18期)

山米工務店

卒業して15年近くになります。私の場合、卒業と同時に東京を離れ、大阪・神戸で4年間サラリーマン生活をした後、家業を継ぐ事になりました。当時(昭和62年頃)はバブル前で景気も良く、退職する時も(独身でもありましたが)不安をあまり感じないで独立できたのですが、家業を継ぐといっても、父は亡くなっていて、今思うと「よく思い切った事ができたなあ」と思います。

京都の工務店は「町家」といわれ、大工さんが主体で、私の様に東京の大学まで出てやっている人は少なく、そういう意味では異色ですが、設計もできるという事でなんとか続けております。京都は古い町で社寺から近代建築までいろいろな種類の仕事がありますが、大学時代に学んだ事も役に立つ事が多く(特にこの頃は

地震の影響で構造の基礎知識が役に立つ)、昔、理大で実験等をした事をなつかしく思います。

建築学科35周年という事で、ますます多くの卒業生がご活躍されます事をお祈り致します。

「東南アジアなど海外業務が増加」

山本 泰宏(部19期)
三菱化学エンジニアリング 建築部

35周年と聞き、時間の流れるのははやいものだと感じました。19回生の私も、卒業生の中で中堅になってしまいました。これから更に卒業生が増えるわけですので、建築業界で理大卒業生の強いネットワークができること、いろんな場所で諸先輩・後輩にお目にかかることを楽しみにしています。私は今、エンジニア会社で、構造設計・意匠設計・現場監理・海外業務などいろんな仕事をやらせてもらっています。今後は、東南アジアを中心に海外業務が更に多くなってきそうですので、業務の傍ら、語学・異文化など多くのものを吸収していきたいと思っています。

「多くの人に喜ばれる公園づくりを模索」

柏瀬 雅人(部20期)
神奈川県 都市部

県立湘南海岸公園の再整備計画の策定に携わっています。昭和30年代に民活導入の先駆けとして整備された公園ですが、現況は「湘南らしさ」とはかけ離れ、施設は老朽化し、観光地としての魅力も低下しています。計画の策定には住民参加方式が求められ、市民団体も含む検討会を設置して検討を進めています。市民団体からは「人工構造物はいらない。緑を守ってほしい。」など施設整備に否定的な意見が出されています。それらの意見も受け止めながら、地域の活性化も考えなければならず、「多くの人に喜ばれるもの」を模索しているところです。

「社会に出てから理大建築学科に思うこと」

田中 周一(部21期)
KAJIMA DESIGN KANSAI

混沌に対して、一定の意味ある秩序状態を作り出すことを私の「建築意匠」の仕事の一つと捉えるならば、大学で得た最低限の造形的能力や優秀な技術者達に支えて頂く為の技術的知識は、どれ一つ役立つものはありませんでした。しかし、これらは最悪、社会に出てからも学ぶ機会があったかもしれません。

一方、完全に理論化することのできない総合的設計に必要な、人間とその社会への深い洞察力・創造力・社会的倫理観をとまなう決断力に限るならば、諸先生・先輩・同級生により、大学院を含めた学生時代にもたらされた示唆的助言や人格的影響力に依るところが大きく、これらは大切な財産になっています。

そういう意味では、私の計画A-1の力不足の囁託の犠牲になった26期の諸君には、特に申し訳なかったと思っています。

「不動産と建築の二つの分野で」

國島 章民(部23期)
國島工業

私は卒業後ゼネコンに就職し、現場に配属後、環境アセスメントの部署、不動産関連の部署と異動しました。そして去年、ゼネコンを退職しました。この間に環境問題、不動産の不良債権化、職安にあふれる失業中の人々など図らずも時代のトレンドを見えました。今年になって不動産鑑定士二次試験に合格しましたので、今後は不動産と建築という似て非なる分野で活躍していくつもりです。

「巨大再開発のおもしろさを実感」

土屋 美彩子(部26期)
大林組開発企画部

入社以来、開発企画部に在籍し、もうそろそろ6年目になります。現在は品川駅東口の再開発コンサルタントの一員として働いています。大規模かつ10社が共同で進める開発で、私は主に開発マネージメントを担当しています。実務内容は未知との遭遇です。開発の現場の臨場感を一度、経験したいと思っていましたが、想像以上にスケールが大きく、建築分野のみならず都市計画と社会経済学が面白いほど様々な問題点を提起してくれます。平成15年にはこの街も活動を始めます。是非、この時代の集大成を見に来てください。

「社会への情報発信にやりがい」

村上 晴信(部27期)
国土庁土地局土地利用調整課

今、役所勤めをしています。若造であるにも関わらず、仕事柄、行政に関する内容や施策の基礎となる調査分析の結果について、社会に対して幅広く文章をもって発信する機会に恵まれています。このため、この原稿の執筆依頼を受けました際には、これまでと同様の感覚で書けばいいなあと考えましたが、いざ書こうとすると、記念すべき35周年会報において、建築という線を共有する各読手が興味を抱く文章って何だろう等と考えてしまい、役所の側から書くことに慣れてしまった私は非常に苦闘しました。だから一言、「慣れてコワイですね。文章の書き方も大学時代に学んでおけばよかったかな。」

「近況報告」

山本 早里(部28期)
鎌倉女子大学家政学研究室講師

'97年3月に東京工業大学で博士(工学)の学位を取得し(論文題目「建築物の外部色彩計画に関する研究」)、97年4月に鎌倉女子大学家政学部の専任講師に就任しました。講義の担当科目は「住居環境学」「インテリアデザイン」などですが、1年目なので講義準備に追われる毎日です。講義をする身になって改めて、理科大の先生方の講義が非常に魅力的なものだったと気付かされました。最近講義準備も軌道に乗り始めたので、引き続き

色彩の研究を進めようと考えています。ご興味ございましたらご一報下さい。

VYB12112@niftyserve.or.jp

「近況報告」

中島 俊典(部30期)
JH日本道路公団

私が在職するJapan-Highway(日本道路公団)東京第三管理局所沢管理事務所は、練馬ICから埼玉県内に至る関越自動車道の道路管理をする組織である。私は施設職員として建築にとどまらずSA・PA施設その他、VICS・情報板等、高速道路付帯施設の維持・改良業務を行っている。最近では、関越道の6車線化に伴う高坂SAのリニューアルオープンが目新しいところだろうか。昨今行政改革が叫ばれる中、JHは世間の厳しい目に晒されているが、より豊かな高速道路空間づくりに向けて、JH職員は頑張っています。

最後に高速に限らずスピードの出し過ぎに気をつけましょう。

「変わらないのは建築に明け暮れること」

深川 克也(部4期)
アール・アイ・エー東京支社

卒業して15年近くになるが、学生生活がついこの前のように思い起こされる。記憶の断片を拾い上げれば、おいしいコーヒーを飲ませてくれる'パウワウ'入ると気が重くなる喫茶 軽い心'肉マン'の魅力に負かされた'五十番'いつかジャンボ料理に挑戦しようと思っていた'神楽坂飯店'語らいの場に使った'萬月'異人長屋'等々、食物屋だけでも1つ1つの店や場所が、非連続に重なり合って多くの先生や友人達の思い出をつくり上げている。歳月が空間と環境を変えてしまったが、1つ変わらないのは今尚、建築にどっぷりつかっているということである。

「近況報告」

小泉 賢次(部6期)
共立建設

今、若者でにぎわっている臨海副都心の一角で現場をやり、街区が出来上がっていく醍醐味(大変忙しい思いをしましたが...)を目の当たりに見て感動し、現場一筋11年で、現場にいるしか能がないと思っていましたが、社命によりあるプロジェクトの一員として、企画提案型の営業に配属になりました。

主な業務としては、情報収集・候補地の選定、調査・工程、構法・工法の検討で新鮮な気持ちで取り組みましたが、なかなか受注につながらず、営業の難しさを痛感し、組織のスクラップアンドビルドといことで一時散会となり、また現場に戻りました。が、その後関連工事の受注の報を聞いて「微力ながら貢献できたかなあ、スクラップのままじゃないぞ」と勝手に思い込んでほくそえんでいる今日この頃で、相変わらずツツツ文句を言いながら忙しい日々を過ごしています。

「自分にとっての理科大建築学科とは・・・」

斉藤 栄士(部8期)
墨田区まちづくり事業推進部

工業高校時代は、建築を学んだ実感がなかったことから、理科大建築学科に入学した。

2部学生の宿命かもしれないが、昼間、働いていたこともあり、授業についていくのがやっとで、建築学を十分理解したとは言えない状態で卒業してしまった。しかし、建築の面白さを学ぶことができたので、卒業後は一層建築に対して興味を持つことができた。

結局、私にとっての理科大とは、在学時は、建築について学ぶきっかけを与えてくれた場であり、また、卒業後は、築理会やOB会での交流を通して建築を学ぶ場として、これからも在り続けるであろう。

「近況報告」

作並 義彦(部11期)
作並義彦・上平井設計室

長谷川逸子さんの事務所に約7年間勤務(すみだ生涯学習センター・新神戸アパートメント実施設計、現場監理)し、今は一人で仕事を進めています。仕事内容は戸建住宅が主です。(といってもまだ2件のみ)それから週2日、高齢者の現状を肌で知りたいと言うことと、安定収入のためにケアワーカーの仕事もしています。(生活のリズムとしても効果有)30代はまだまだ落ち着きそうになく、やりたい事が色々多く動き回っています。

最近の楽しみは現場(奈良)からの帰りに新幹線を使わずに在来線で帰る事。土地の言葉に耳を傾けながらの車窓からの風景はなかなかのものです。

「自然の雄大さ、力強さに感銘」

金林 義隆(部12期)
カンダックス一級建築士事務所

私が理科大を卒業して早いもので6年半、仕事に追われる毎日を過ごして来ました。昨年秋に事務所で住宅の設計を請ける事になり私が担当しました。施主が要望した住宅とは「健康に過ごせる住宅」=パッシブソーラーハウスで出来る限り自然の材料を使用したいという事でした。慌てて、太陽伝達熱量、結露、熱貫流率、珪藻土、木の性質等を自分なりに勉強しました。色々な事を調べて行く中で、一番感じたのは自然の雄大さ、力強さ、そして自然を未来に残して行く事の重大さです。忙しい毎日ですがその事だけは忘れずにいきたいと思えます。

「建築学科への編入が吉と出る」

中川 信浩(部13期)
中川工務店

私は、学士入学でした。思えば現役で本学理学部第2部数学科へ入学した年に、この工学部第2部が新設されたように思います。

当時、入学に当たって高校の先生に「君は建築学科

じゃないんですね？」と言われました。しかしその後、卒業して幾年がすぎ、この科へ編入学したことが、今思うと吉であったとおもう。

もし、最初から建築へ行っていたなら…それは、誰にもわからない。しかし現実には、杉山研究室に在籍させていただき、杉山先生の御指導のもと川合先生の研究を微力ながらお手伝いさせていただいたということと、また、同室の院生、研究生、それと2部ばかりでなく1部の人々とも交流を持てたということである。

理学部の時は現役である私は最年少でした。同級生でも廻りの生徒はほとんど年上である。それが工学部では、私がそれなのである。先生とは決して先に生きていない。実際私と川合先生は同世代であり、もっとすごいことに、杉山先生(1925生)より一年下という学生もおりました。

杉山研究室では、川合先生の「伝統的木造建築物の常時微動測定」のお手伝いをさせていただきました。その縁か、卒業後も何度かその測定に参加させていただき、目の保養をさせていただいております。杉山先生曰「人の往く、裏に路あり、花の山」その後、構力をやりなさいと。

「近況報告」

岡野 裕行(部15期)
アーキデザイン

「世の中そんなに甘くない!!」そう感じたのは、1995年春、JIAの新人研修に参加したときだ。それから頭にチラついているのだが、「これからの建築」に対する不安。単にそれは自分の実力のなさに問題があるのだが、「これからの君たちは、ハードでなくソフトを創ることが大切になる」と教えられ、それにはあまりにも知識がないことに焦りを感じた。それから、より意識的に世の中の多くの物・事・人に注意を払っているつもりだが、まだまだ自覚が足りないように思う。しっかりとした信念を持って、社会に対する責任を果たせるよう、ここに決意を新たにす。そう、理大建築学科での教えをもう一度思い出して…。

「近況報告」

橋本 勝和(部16期)
藤澤建設 設計部

現在、建設会社の設計部に勤めているのだが、東京理科大学と言うと「お、すごいね」とか「優秀だね」とか言われることがある。理工系では名門大学として有名である理科大を卒業したのだからこう言われても仕方がないし、まあ悪い気もしない。しかし、私は2年ダブりました。理由はあえて言わないが、卒業してしまえば関係ない。でも社会に出て感じる事は、仕事上での高卒と大卒との4年間の開きという事である。4年間の開きというのはかなりのものであり、自分では、「さすが2年ダブっても理科大卒だね!」と、言われるように頑張っている今日この頃です。

「近況報告」

大石 光良(部17期)
谷内田章夫/ワークショップ

現在私は、谷内田章夫/ワークショップに入社してまもなく2年が過ぎようとしている。目標としている人、谷内田氏のもとで仕事ができ、とても恵まれた環境にいると思う。

社会状況が反映してか、いまだに担当物件がない状態であったが、ここにきてようやく、担当者の一人として10階建てのビルの仕事に参加できそうである。

住環境に新たな解答を示している谷内田氏の考えをめいっぱい吸収し、自分の一部になる様に努力したい。計画段階ではあるが、いまからこの現場に出るのを、不安ではあるけど、楽しみにしています。

「平成八年度卒業生のよせがき『建築家と学校』」

原田 賢一(部18期)
architecture WORKSHOP

建築の世界は狭いと聞いていたが、ホントに狭いと思った。どこかの展示会で出会った人に、すぐ仕事で会う機会が多々ある。そうした所で出てくる話が、互いの学部や院での課題や講評で得た建築家のマニフェストや現代性に向き合った建築的ディスカールであったりする。

こうしたものは内容の是非は別にして、学生の深層心理に大きく作用する。結果として、モノを創る上での原動力又は起爆剤になり得ている。

最も悲劇的なのは、課題を通してそのような作家に出会えなかった事である。これはなにも、「設計の指針とは、建築家に与えてもらうものだ!」といことを言っているのではない。

ある大学の講師をしている建築家は、教えている大学の学生とワークショップ形式で、事業コンペを行ったりしている。

建築家は常に思想を推敲しながら設計している。この過程に触れることは、僕にはどんなエスキースより楽しく有意義だった。学生は、そうした活動により、設計の本質を知り、自己の立脚点を見つけ、設計に於けるアイデンティティーを形成する機会を得るのである。多くの他大学が一線で活躍する建築家を講師として招くのには、こうした機会の意義を理解しているからだ!!!

原田 賢一 小幡 亮太郎 古賀 賢

'97年度築理会現場見学会の感想

小島 正敏 (部22期)
五洋建設 技術本部

今回の建物は晴海1丁目の50階建の超高層住宅である。住宅・都市整備公団による「晴海アイランド・トリトンスクウェア」と呼ばれる、晴海1丁目地区市街地再開発事業の一環であり、施工は三井・清水・松村・新井JV。設計は住宅・都市整備公団東京支店および三井建設(株)殿による。建物概要は築理会報97秋号を参照されたい。

住棟計画の特色

中央に12m四方の吹き抜け(外部扱い)を持つ「ポイド型住棟」である。

集合住宅としてはかなりゆとりのある3.05mという階高を採用し2重床、天井張りとしている。

全632戸の内、500戸近くは従前の土地所有者および借家権者であり、基本的に住み替え用の住宅である。したがって、各住戸の詳細意匠はヴァリエーションに富み、というより1つとして同じものはない。

感想:47階のベランダに立った時、高層棟にどうしても入りたがらなかった方の気持ちが解るような気がしました。ただし、隅角部の一般ベランダと比較し、逆梁を利用し内倒し手摺とした一般部のベランダは、かなり高い安心感を感じました。

構造計画の特色

高層部の基礎に地中連続壁杭を使用している。

高層部を柱CFR構造&梁SC梁とし、パネルゾーンに高張力の鑄造鋼および鍛造鋼を使用している。

感想:竣工が近く、今回は躯体の詳細は見れませんでした。

設備計画の特色

ガスを使用しないオール電化方式であり、多機能ヒートポンプを使用している。

住戸用スプリンクラーを設置している(自主改善)。

感想:安全面、高齢者対応に関し、高い配慮がなされていると感じました。

施工計画の特色

逆打ち工法の採用と一般部ハーフPca板成床、外周逆梁フルPcaとし、施工の迅速化を図っている。

感想:地下2階地上50階の建設を、39ヶ月という期間で達成した施工部隊の方々の努力に、驚愕に近い驚きを感じました。

最後に、今回の見学会の手配をしてくださった、三井建設(株)の河合さん(部7期)現場で説明をしてくださった、三井建設設計部の柏木さん、JV(三井建設)の古川さん(部23期)に深く感謝致します。

訃報

日笠 端 元教授・東京大学名誉教授

本学元教授・東京大学名誉教授日笠端先生は去る10月30日(木)逝去されました。享年77才でした。

先生は昭和18年東京帝国大学工学部建築学科を御卒業後、戦災復興院、建設省建築研究所において都市計画の調査・研究に従事されました。そして昭和39年に東京大学工学部教授となり、創設間もない都市工学科で都市計画第一講座を担当されました。

昭和56年に同大学を停年により退職された後に東京理科大学工学部建築学科教授となり、都市計画及び地区計画を担当されました。平成7年まで14年間その職につかれ、平成8年からも同大学非常勤講師として引き続き都市計画の研究・教育にあたっておられましたが、そのさ中のご逝去でした。先生は、広範にわたる都市計画の諸分野において多くの業績を残されましたが、中でもドイツの地区詳細計画制度をいち早く紹介し、高度成長期より他の研究者に先駆けてコミュニティ計画及び住環境整備について先進的な研究を行われました。こうした先生の研究は、生活者の視点に立った都市計画制度・技術という新しい流れを作りだし、その後地区計画制度の創設等として結実しました。そして、先生のもとから育った多くの後進により、その流れは今なお大きく展開されつつあります。

学外においては、日本都市計画学会会長の職に就かれた他、各種学会活動、学協会の発展に尽くされました。一方で、都市計画中央審議会委員、東京都住宅政策懇談会座長等を歴任し、都市計画実務の向上にも貢献されました。先生は、広い教養がなせるウイットあるお話と温和な風貌から、人を引きつけて離さない魅力に満ちた方でした。ここに深く哀悼の意を表すると共に、謹んでご冥福をお祈り致します。

(小泉秀樹・部23期、東京大学工学部都市工学科)

会員の活躍

中村弘道(中村弘道・都市建築計画設計研究所、1部1期)

「小田急秦野駅橋上駅舎自由通路」:

平成9年度グッドデザイン施設部門グッドデザイン賞入選

平成9年度鉄道協会賞入選

菊地 宏(東京理科大学大学院・鈴木研2年、1部31期)

新建築住宅設計競技1997「コラボレーションの家」1等

審査員:ジャック・ヘルツォーグ。

季刊『J A』9804掲載予定。

